光寿無量の願が真に成就するのである。まことに阿弥陀仏は光寿無量の願に酬報した真の報身仏といわねばならぬ。

かくて光寿無量の願に酬報した身なればこそ、阿弥陀仏はひかりのかたち、智慧の相に外ならぬのであって、光寿無量こそ大悲の根本ということが領解せられるのである。もと光寿無量の願は摂法身の願と云わるる如く、如来自身が光寿無量ならんと誓われた自利の本願であるが如く思惟される。然しその自利成就はそのまま利他成就であって、光寿無量の本願は大悲摂化の無碍なるはたらきをあらわす慈悲門に外ならない。即ち光明無量なることに於いて、影なき光が一切に透徹するが如く、限りなき智慧において十方を摂取し、又寿命無量なることにおいて、現在に永遠の過去と未来を孕んで十方の衆生を包み、そこに限りなき如来の大悲を顕示せられたのである。かくの如き慈悲極りなき大悲の名が南無阿弥陀仏であって、この南無阿弥陀仏において、十方衆生を大悲の願心に帰せしめ、そこに光寿無量の慈悲門を成就せられるのである。ここに光明寿命の誓願を大悲の本とする根本的意趣を知るべきである。

## はかりなき光

光はかりなきが故に阿弥陀とよぶ。量りなき光はものに碍えられるということがない。その無碍の徳を、われらは念仏に於て感知せしめられる。故に「念仏者は無礙の一道」である。

仏を観ようとすれば、仏を離れる憾みがある。名を称うれば、仏は常にわれらに来り給う。仏はその無碍の光を名の上に現わされるからである。

されば光明はかりなしというも、仏身の上に観うることではない。ただ念仏に於て感知せしめられるものである。洵に遍照の光明も、念仏するものを摂め取りたまいて、阿弥陀とならせられるのである。

（金子大栄著〔口語訳教行信証〕領解より）